

---

# 義手と練成の問題

逆叫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義手と練成の問題

### 【Nコード】

N0627F

### 【作者名】

逆叫

### 【あらすじ】

虚空から物質を作り出す、錬金術師と謳われていた少女は、成り行きで腕を無くした少年の監視をすることになる。更に、感情と利害が入り混じった成り行きで、彼の夢見るバンド部を創部することになる。ちよつとカオスな学園物です。

## 発端

私の様な存在が生まれたのは、創造主の意図か、人間の自惚れか。チカラの存在を知ったのはいつだったろうか。両親が蒸発し、独りぼっちになった頃だろうか。独りぼっちになったのはいつだっただろうか。

物心ついたところから。

そのチカラから、無限といってもいいほどに溢れ出てくる知識、情報、感情。生ける神の様になったかと錯覚するほど私は脆かった。自意識の隙間にあるチカラ。成人した人間が所持している知識と同じ量の知識が、幼子であつた私にどれだけの負担をかけたか。その負担が私を壊した。

人は私を錬金術師と呼ぶ。原子と原子を混ぜ合わせ、全く異なる原子を作り出す学問、それが錬金術と呼ばれるらしい。失敗しても飽きずに努力を重ね、ついに実らず科学という人類を進歩させたか、衰退させたか分からない対象に逃げ込んだ。

そうして考えると、私はそうした人間の欲望の結晶だとは思えない。自分のそう思った物質を作れる。練成できる。これを知ってしまった一部の人間は、私を錬金術師と信じる。

私はそうじゃない。信じていない。私は人間だ。

子供が受け入れられるはずの無い量の情報を飲み込んで、是認してしまった私に常識は通用しなくなってしまった。無垢に自分を偽らない、子供の心は失われてしまった。

無愛想だと思われた。私は謙遜されていく。しかし、私は当然の反応だと思ってどうしようもしない。

無知はどうしようもないくらいの罪。その罪は重すぎて逆に罪と認められなくなってしまう。私は、誰かの操り人形としてこの世に召還されてしまったのに過ぎなかった。

ある日異空間に迷い込んだ。パラレルワールド。誰も居ない。静かな街。私の与えられた知識の中には存在しない。誰も知らない世界。

そこに存在するのは、元居た世界では考えられない情報。平和と平穏を望んでいる大半の人類にとっては残酷な事実。

それを呑みこむのは辛かった。

弱いものは自然淘汰されて、強いものが上にのし上がる。強いものは更に強いものに倒されて、そのローテーションは世界が存在する限り続いていく。一部の人間は既にそれを認めている。弱いものにとつては、ただ傍観するしかない世界。

そんな弱いものに、それに対抗できるチカラを与えて、世の仕組みをこつた返そうとしているものがある。誰。そんなことは気にしなくてもいい。そのような存在がいることだけを信じて、今を生きていけばいい。

その異次元空間から脱出したとき、私は成長していた。

荒廃した病院。ベッドとその周囲のカーテンが無造作に置かれているだけで、とりわけ目立ったものがあるわけではない。窓の外に桜がそわそわと揺れている。

知っているはずが無い。ここは未来。私の体がそれを物語っている。でも知っている。このチカラはどこまでも知識を追いつづける。この世にある全ての情報を知り尽くしたとき、このチカラは新たな情報を自ら作り出す。

「もしもし。」

近くの公衆電話。携帯電話の普及によって、徐々に少なくなっているものである。

近所の人から、両親に見捨てられた女子高生の役を演じ、テレフオンカードと近くにある高校の電話番号を借りると、その公衆電話からその高校へと電話をかけたのだった。

「はい、こちら県立西高校でございます。」

よくとおる、初老と思われる男の声が響いてきた。

「転校生の紹介です」

クラスの中がざわつき始めた。無理も無い。今日は始業式から二日経ったばかりだからだ。先生も少しばかり口端に疑問を映しているが、恐らくは手違いがあつたと聞かされているのだらう。少しばかり雑だが、型にはまった転校生紹介を始めた。

ほしやましん  
「星山新です。」

少し前に出て、そう言つて礼をする。溶け込めるかどうかは分からないが、皆出会つてそう経つていないと思われる。それなら、クラスとのハンは同じくらいな訳だから、問題は無いだらう。

「そんじゃ、あそこが一番後ろの席に」

「はい。」

先生にそう指示されて、私は窓際の一番後ろの席についた。朝方は日が差し込むらしく、机が温まっていた。

「それでは、今日の予定ですが……」

私は、普通の人間らしい生活を送れると信じていた。

昼休み。窓際の席でぬくぬくと日差しに当たっていると、前の席の子がある種残酷な旨の言葉を言つて来た。

「お弁当……？」

「うん。あれ、もしかして忘れちゃった？」

前の席の梁瀬真利やなせまりという女の子が、なんとなく無愛想に見える私に結構友好的に話し掛けてくれたので、溶け込めるかどうかは大丈夫だと思ひ安堵した。

それでもこのチカラが知らない情報は無論、無数に存在するのは確かだ。

「忘れた……」

かといつて、購買部で何かを買つたためのお金も持ち合わせていない。というか、それ以前にお金を一銭も持つてないから仕方ないこ

とだけど。

「そつか。まあ仕方ないよね。私のいる？分けてあげようか？」

ショートカットにした髪を揺らして、私に弁当を差し出してくる。この好意は、乾いた井戸に降り注ぐ雨のように嬉しかったが、それでも馴れ馴れしくそれを受け取ってしまったのは憚られた。

「え、いいよ。そんな。」

「ん……そう。でも食べないと午後お腹すいちゃうよ？」

「大丈夫。我慢するのは慣れてるから。」

「そつか……そうだ、購買部でたまに余ったもの配ってたりするかそれを見てはしてみればどう？あんまり期待はできないけど。」

「ありがとう。」

私はそう言って席を立った。

北側の校舎の一階に点在する購買部。真利にいわれたとおりに来てみたが、期待しないほうがいいという言葉どおり、見事に完売していた。

とはいえ、なれているという言葉は嘘ではないし、午後は昨日やったというテストを返すだけと聞いたので、ひもじいのは大丈夫だろう。家に帰ったところで食べられるかどうかも怪しいが。

昼休みは、まだ大分時間がある。それだけ購買部が人気なのがよく分かった。

教室に帰って昼休み終了まで他の人が弁当を食べているのを見ているのは、意識が我慢できても、体と理性は黙ってはいないかもしれない。

屋上開放がされているとのことだったので、私は暇潰しと、下見と、風に当たりに行くのを兼ねて、屋上に赴いてみることにした。

屋上の扉を開いて、出てみたが、そこに広がっていた光景に目を瞠るしかなかった。椅子が用意されているようだが、それ全てに群がるように生徒が座っている。それも大体がグループである。このこと入っていけるはずも無い。それにほとんどが先輩のようだ。

建物の面積と同じだけの面積がある屋上は結構な広さがあり、端から端を歩いて往復するだけで結構時間がかかりそうだ。

しかし、私は何故異次元に迷い込んだのだろうか。ましてや、何故今ここに放り出されたのだろうか。

異次元にあったもの。人間の悪意、欲望、真意、恐怖。存在意義。知りたくも無いのを知ることになる恐怖。

何年間いたのだろうか。十、十一年ほどだろうか。

世界は大分変わった。それでも私は、きちんと現実を受け止めて、「今」らしく生きている。

錬金術。もしくは、それと酷似した能力。錬金術なんてものじゃない。これは兵器にもなりえる。誰にも見せるわけにはいかない。

上履きの底が何か、柔らかい球体を踏んだような気がした。それと同時に上がる、声にならない声。数瞬後に、それは食べ物だと悟った。

恐る恐るその声の方向を見ると、『足が脆くなっているので座らないで下さい』と、座る板のしたから垂れ下がっている椅子に座った男子生徒の姿があった。まさに呆然として、私が踏んで原型が分からなくなっている（じゃがいもかな）を見ている。

「あ、ご、ごめんね……。」

さっと足をその上から退けて、そう言うと、その男子は顔を私の方に向けた。どこかパツとしない顔であるが、別段悪くは無い。

私を凝視しているその目は、どこか意識が灯っていないように見えた。私はつい混乱して、よつぽどショックだったのか、と思って次の句を重ねた。

「ほ、ほんとごめん。ちょっとよそ見してて……。」

少しばかり上ずってしまったと、自覚しながら相手の機嫌を伺うと、ハツとなったように瞳に色が戻った。それから、どこか慌てたように言った。

「べ、別にもう落ちたもんだから構わない。」

それを聞いて少し安心したものの、すぐに彼が無様に潰れてしま

つたじゃがいもを見て、頭を垂れてしまったのを見て、罪悪感が援軍を連れて戻ってきてしまった。

「……あ、これ使う……？」

そのままスルーしていつてしまうのは人間としておかしいと思ったので、朝、登校途中に貰ったポケットティッシュを差し出してみた。

彼は顔をあげてそれを見た。すると、そのままスイッチが切れたようにそれを凝視し始めた。

「だ、大丈夫？」

どこか不可解な彼の行動に、自分が大変な間違いを犯してしまっただんじやないかと不安になって尋ねた。また瞳の色が失われている。

「ああっ！サンクスっ！」

しかし、そのあとハツと目に意識を取り戻して、私の差し出したティッシュを受け取った。それからビニールの隙間からティッシュを一枚抜き取って、潰れたじゃがいもだったものを拭き取った。床には跡が残ってしまったが、時間が解決してくれるはずだ。

「あ、これありがと。」

そんな光景を、なんとなく見ていたら、彼がまたティッシュを差し出してきた。手が不器用なのを隠そうとしてか、指が不自然な位置にあるのを見ると少し面白かった。

「うん。ありがと。」

私も何故か礼を言って、彼の傍から踵を返して、自分の歩いてきた道に指針をとる。

「あー悪い悪い。遅れた。」

立ち去り際に、彼の友人らしき人物がきたらしく、生物兵器並に悪い呂律でそんなことを言っていた。

風はほとんど吹いていなかった様に感じた。

夜の学校は、しんみりとしていて気味が悪い。よく怪談話などの舞台になるのも無理は無いと思う。むしろ、そういう怪談話の舞台



にさせたから、そういつたイメージを持たせてしまったのかもしれない。人というのは、先入観でものごとを決める傾向が強い。

何故こんなところにいるかというと、件の異次元くだんのことが大きく関係してきている。

異世界の《何者か》が齎あたした情報によれば、魔物おぼしき存在してはいけな存在が、この世に誕生してしまったらしい。

私は救世主になるらしい。

ふざけるのもそろそろおしまいにして欲しい。何が救世主。そんなもの存在するわけが無い。未来を予測できる者なんて。

とにかく、そういう事情があつて、こうして夜の学校に赴むかっているのだ。

恐らく私は召還された。この閉鎖された土地に。

このあたりに四散する中学校の優秀な人間ばかりがこの学校に集まってくるように仕組まれている。そんな感覚がする。逆に優秀ではない人間は、この近くの私立高校に行くことになる。そんなシステムができあがっているのだ。

所以ゆえん、そんなところに意味も無く投下されたわけでもない。となると、このあたりにそういつた望まれない存在があることになる。

そうなると、やはりこの学校が怪しい。私の転校をあつさりとは認めた態度。気に食わないというか、おかしい。

ザプっ！といきなり糖分でべとべとした液体が上から降ってきた。もちろんそれは私の体をびしょびしょに濡らす。

「何？」

そのあと何かがコツンと頭にあたる。踏んだり蹴ったりだ。全く……。

私の体を濡らした液体が入っていたと思われる空のペットボトルを拾い上げる。どうやら屋上の自販で買ったものらしい。単に炭酸水の中に砂糖を入れただけの粗末な代物だが、意外と人気らしい。

私はため息をつく、それを鞆に入れようと手をかけた。このまま放り投げて行くのも少し気が引ける。と、思ったら今度は、

人が落つこちてきた。しかも、男らしい。

「きやああああ！」

あちらは背中から、こちらは頭から当たってしまったらしい。もろに正面からぶつかりあった両者は相当な衝撃を双方に残し、それぞれ崩れ落ちる。正に泣きっ面にスズメバチだ。

「いたた……。」

私が常人だったら死んでいたと思う。絶無結界張つという良かった。

錬金術と彼らが呼ぶ魔法のようなものの一つで、特殊な無色の金属で体をコーティングしているような感じだ。しかも衝撃を吸収するだけで、当たってきたものに特に損害は出ない。

じーんとした感覚の残る頭をさすりながら、私の頭上から振ってきた人に近づいた。途端に、鼻を強くつくような腐敗臭に襲われた。

これは……！

砂糖水を被った後に、ペットボトルを喰らったことなど瞬時にどこかへ捨て、そこで倒れてる人に駆け寄る。左腕は完全に腐敗しきっている。

(……あの毒……。)

強烈な腐敗臭にこの腐り具合といったら、あの虫の毒だろう。いきさつはどうか知らないが、どうやらこの木の上でこの砂糖水を飲んでいたら、黒い虫に刺されたのだろう。

黒い虫。異形の怪物。

虫。なんとありきたりなのだろうか。恐らくのところ蠍トコジマのような容姿をしていると、《何者か》は言っていた。というか、そのような情報を教えた。

私がクツションになってしまったせいか、他の外傷は少なかった。良かった。

すぐにでもその虫の行方を追いたいところだったが、この人を見捨てるわけにはいかない。この毒は特殊で、その体の一部を完全に腐らせきってから他のところへ毒が広がるのだ。

鞆から小さな小瓶を出して、中身を全てその腐っていく左腕、とくに付け根の部分にその中身をかける。少し狙いが逸れて、私の太股に掛かってしまったがきにしない。

解毒剤だ。あの廃病院で見つけた、ハブの毒の血清を私が改造したもの。分子構造を少しいじるだけだったから楽だった。

これで多分毒は消えた。でも、この腕は気の毒だが、切るしかないだろう。ほとんど腐りきる直前だったのだ。

よく観察してみると、暗がりの中だが、その人が着ている服がこの高校の制服だと気づいた。だからよく顔を見てみると……

「あつ……。」

昼休みに煮つ転がしを屋上で転がしていた人だった。恐らくは同学年。

どうして生徒がこんな時間に、木の上でジュースを飲みながら？

「はぁ……巻き込んだじゃった……。」

素朴な疑問は山積みだったが、目の前にある大事な事実を解決する方が優先順位は高いだろう。

私は両手を特殊な形で組んで、念を唱えた。

「磁界動戒石……。」

それは単なる強力な磁石だ。だが、地球上に存在するN極、S極どちらでもない物質のもの。だから、必然的に反発によって宙に浮いていることになる。

本来ならば、そのまま反発で宇宙空間まで飛んでいってしまうのだろうが、何故かうまくバランスがとれて、中を浮遊している。これに関してはあんまり私も情報を持っておらず、気がついていたら持っていたもの。そうしたものにはチカラの意思によって作られているものだ。私がどう研究したところで、新しい物質は作ることができない。

気絶しているその人をその石に載せた。男子だから重いのは当然なのだが、さらに意識がないと更に重くなっているように感じる。

腕は緑色に変色しているものの、既に腐敗は止まっている。もし

も毒が回っていたら、それは厄介なことになる。

その虫の毒は特殊な毒で、ある体の一部分、今回は腕だった<sup>が</sup>、そこを完全に腐らせきってから、全身に回るとい<sup>ゆ</sup>性<sup>えん</sup>質がある。所以、その部分が腐りきる前に解毒してしまえばいいのだ。

だが、腐敗してしまってから、解毒してももう遅い。この異常な腐敗速度が語るように、全身に少しでも毒が回ると、死は確定したと同義だ。

腐りきった腕を切り落とし、銀色の容器に入れる。まだ臭いが、さつきよりはマシだろう。

泥まみれの制服の名札には神楽<sup>かぐら</sup>と書かれている。恐らくは毒は回っていないと思う<sup>が</sup>、もしもまわっていて、死んでしまったら家族にどうやって説明すればいいだろうか。

私は首を振って、意識をしつかりとさせて、彼と向かい合う。

私が塹<sup>ねぐり</sup>にしている、廃病院の一室。電気はつかなくて夜は不便だが、すめないことも無い。

私は、少し視線を下に下ろして、それから決心する。私の行動力の無さが引き起こしたのだ。それなら私が責任を負う義務がある。彼の右手は、何か楽器でもやっているような手<sup>を</sup>していた。恐らくやっているの<sup>だ</sup>らう。それならば、作ってやらねばならまい。

義手を。

素材は、チカラが初めて作った、ソダロスティックという素材。私が勝手に命名した。

重さは私が自由に決められて、形もそれなりに自由が利くので、もってこいだらう。

窓の外で、バイクのエンジン音が聞こえた。

## 発端（後書き）

一応、シリアスな感じなんですけど、これは部活メインの学園戦闘物です。これは下敷きといったことで、伏線をばら撒こうとしたんですが、大して撒けませんでした……。とりあえず、次回からきちんと始まると思います……

## 義手

ピアノが置いてある。グランドピアノだ。シンプルな、黒くて装飾品のついていない簡素なピアノ。私が目覚めたときからここに置いてある。存在は知っていたものの、弾いたことなどないから弾き方など分らない。

真っ白な鍵盤の一つを叩くと、音がでた。それくらいは知っている。

適当に鍵盤を叩く。弦の悲鳴とともれる、重厚な音が閉じた蓋の内側から聞こえてくる。

……懐かしい。

一度も触れたことも、ましてや見たこともなかった。ただ知っていただけの存在だった。だが、どこか懐かしい響きがする。

本能に殉ずるままに、鍵盤に指を走らせると、全く知らない、本当に知らない曲を奏で始めた。曲名など分かるわけがないが、どこか懐かしい。知っているはずがないのに懐かしく感じる。

何故この廃病院は、血清などはまだ分かるかもしれないものの、ピアノなどを個室に置いてあるのだろうか。

その疑問をふと頭に思い浮かべたとき、とある鍵盤を叩いたら妙な音がでた。もう一度叩いてみると、また妙な音が出る。恐らく弦が切れているのだろう。

私はため息をついて、その鍵盤を避けるようにして、もう一度指を躍らせてみた。

どうしてこう、悲しいというか、切ない曲しか弾けないのだろうか。どうして私はそういった曲しか覚えていないのだろうか。

だが、答えが出るはずもなく、それを知ってて私はただひたすら鍵盤に指を走らせていく。

指が無意識のうちに止まった。

後ろを振り向くと、カーテンの後ろに動いている気配を感じた。

外からの明かりで、ぼうつと影が映し出されている。

私はピアノの傍から離れて、ゆつくりとカーテンを開いた。

神楽君が、びっくりという言葉を顔に浮かべていた。その顔にはあからさまに混乱の色を浮かべていて、その左腕を右手で抑えている。

混乱できるのは、思考が安定している証拠。きちんと説明すれば恐らく分かってくれるはず。……。

「あ、起きた。良かった……。」

そう言って近づくと、彼はぎよつとしたように身をすくめた。左腕がぱんとベッドの上に投げ出される。一応動いてはいるようだ。ソダロスティックは、自由がきくものの、クセがそれなりに強いので、拒絶反応を起こすときは徹底的に起こし、最悪死に至る。かといって、他の素材を選んだとしても、これに勝る適材はないので、一種の賭けとしてこれを選んだ。見事に賭けには勝てたようだ。

私はベッドの左側にまわって、彼の左手を握ってみた。体温は完全に義手に染み込んだようで、金属の様な冷たさはなく、頼りになりそうな体温が感じられる。

「これ……使える？」

金属質の色を湛<sup>たた</sup>える指を、確かめるように動かしながら、私は訊<sup>たず</sup>ねた。拒絶反応が出るか出ないかの問題とは更に別、きちんと動かかどうか。それは確かに、理想ではあったが、私は少しのリハビリの必要性を覚悟していた。

「あ、ああ。一応。動くことは動く。」

そういうと、彼は自らの意思で指を動かした。

「良かった……初めて作ってみたんだけど、きちんと動くかどうか心配で。」

そう言って胸をなでおろす。

ロボットの設計図などを基にして、先ず普通に形を作った。それから、モーターを作り、動力源の確保をする。エネルギーは、体から血液を媒体として送るのが普通だが、ここに特殊な液体を介させ

ることによって、熱エネルギーを電気エネルギーに変換させる仕組みをつくり、それを電気コードでそのモーターへと繋げた。これで停止することもない。慣れるまで、モーターが誤作動することも度々あると思われるが、これは時間が解消してくれるはずだ。特殊な液体とは、チカラの情報によれば他の素材と違って限りのあるものらしい。私もそれを信じて極力使用を避けてきた。

「はあ……それは……。ってええ！？作った！？」

その素っ頓狂な声を聞いて、思わず口を滑らせてしまったと悟ったが、もう後の祭り。彼は目を限界まで見開いて私を見ていた。その瞳には、尊敬といった私が負うには重すぎる言葉が浮かんでいる。「て、ことは……これ義手？」

改めて確認する彼に私は何とか嬉しそうな顔を装って、言う事ができた。

「うん。ホント動いて良かった。」

どこか自分の惨めさに、哀れみを感じて涙が溢れてくる。バレてなければいいけど。

「ってことは……俺の左腕は？」

「あつ、えとっ」

そう訊かれて、私は少し取り乱してしまった。

見せてショックでも受けてしまったらどうなるだろうか。彼は虫に刺されたときに自分の腕が腐っていくところを見ただろうか。

視線を泳がせて、黙り込んでしまった私をみて、不審に思ったのか、彼が言って来た。

「もしかして……融けた？」

その通り。融けた。否定はできない。

「と、融けたわけじゃないけど……。」

それでも語尾を濁しながら否定してしまう。申し訳ないという念に頭が支配される。

彼の目を見たらもう戻れなくなってしまうた。真実を知りたいとまっすぐに思う、真摯な眼差し。怖いくらいに私を見据えていた。



仕方なく、おずおずとベッドの下に手を伸ばし、少し重い容器を持った。軽くまだ腐敗臭が残っているがいずれ消えてしまっただろう。「融けてるじゃねえか……。」

そこに入っていたのは緑色の液体。筋肉はおろか、骨まで緑にそまっただけだった。

「うん。まあ、そう言っただけ……。」

彼の突っ込みをもろに受けて、私は立つ瀬が無くなってしまった。視線を逸らす。

彼は少し嗚咽を漏らして、視線を逸らしたので、私はその容器を給湯室だった場所に持っていった。完全に暗くなっているものの、私は夜でも目が利くほうなので困らなかった。

流しにまとめてその中身を流す。このまま放置しておけば、空気に含まれている窒素チッソとなんらかの反応を起こして、ただの色水になるのではないかと思ったが、とくに残しておく理由もない。

そうして腕だったものを片付けると、彼は訝しげに義手を覗き込んでいた。どうしたのかと思い、近づくと顔を私に向けていった。

「なあ……これはおかしいだろう。」

「動作不良か何かある？」

不安が光のごとく意識を横切る。

しかし、彼は手刀を作っと思いつき左右にぶんぶん振った。

「いや、そうじゃなくてだ。こんなのよく作れたなって。俺の左腕をそのまま金属のカタマリにしたような……そんな感じだ。全く違和感が無い。うん。」

まだ不安は残るけど、なんとなくその言葉に含まれている私への心遣いが嬉しかった。

「それならいいんだけど……でも神楽君なら大丈夫かと思ったよ。普通の人なら拒絶反応とか起こしたりしたかもしれないけど。」

「ん、何で俺の名前知ってたんだ？」

どこか興味深げに訊いてきたので、私は言葉に詰まってしまった。「名札……。」

無礼を詫びるようにおずおずとそう言うと、彼は自分の胸を見下ろし、納得がいったように顔を綻ばせた。

「そうか……これは盲点だったな。」

なんとなくおかしかったので笑いそうになり、それを抑えるようにしたら微笑したような表情になってしまった。それを隠すように私は立ち上がって、彼の寝ているベッドを取り巻いているカーテンを束ねた。外からの日の日差しがはいりこみ、彼は眩しそうに目を細めた。

「今日で三日目。もしかしたら毒が回っててもしやと思ったんだけど……。」

彼の気を紛らわす意図をこめて、そう言った。そうすると、目が慣れたのか彼は手を下ろした。

「毒？」

「うん。毒。変な虫に刺されたんでしょ？」

「ああ……。」

彼は納得したように声を漏らした。それまでは単なる推測でしかなかった要素がこれで確信へと変わった。

「そうだ。そう。変な虫に刺されたんだ。」

「……。」

なんでもないように、自分の腕を奪った要素を軽々と言ってのける彼を見て、私は自分に恥じらいを感じた。チカラの存在を鬱陶しく思わなかったことなどない。私はこれに壊されたようなもの。

彼は、常人の常識外の成り行きで義手になったというのに、全くその目に不安を佩びていない。私とはまるで正反對。

「ピアノ……弾けるのか？」

私は窓の外に逸らしていた視線を彼に戻した。その目はそこに大きく置いてあるグランドピアノに向かっている。よく見ると、金属部分が錆びているのが目に入った。

「うん……少しなら。」

あくまで、これはチカラの情報下におかれた腕前でしかない。こ

れは私が弾いたわけではない。奏者の気持ちの籠っていない音楽に上手下手など存在しない。それでも聴かれてしまった以上否定するわけにはいかなかった。

私がそう言くと、彼はため息をついた。脱力ではなく、感嘆のため息だった。私をそれを見て、自分の気持ちの溝が深まっていくのを感じる。

すると彼の顔が、ミステリードラマの主人公が謎を解いた時の様な顔に輝きを増していった。私は、人間の直感というもので、厄介なことに巻き込まれるんじゃないかと思ったが……

「……どうしたの？」

彼の視線は私の服に向けられているようだ。見ているというよりは、凝視に近い。そして必死に何かの思考をめぐらせているようだ。った。

突然舌を噛んだように顔をしかめてから、私を正面から見据えた。

「俺と同じ学校だよな？」

それから私は、自分の着ている服が制服だったことに気がついた。初期状態で着ていた服があつたが、朝ゴミ収集者に持ってかれてしまった。

だが、私はそんなことお構いなしに、彼の真摯な眼差しに圧倒されていた。そんな風に圧されて私はゆっくりと頷く。

「部活入ってる!？」

首を横の振る。

「それなら！」

その答えを聞いて勢いに乗ったのか彼は、一気に畳み掛けた。

「一緒にバンド部を作らない!？」

どうしようもなく突飛なその質問というか誘いに、私は目を点にして彼を見ることしかできなかった。バンド部というのは、軽音楽部のことだろう。うちの学校にはなかったはずだ。だから作らないか、という発言。

私に興味なんか存在しないから、部活のことに關しては無頓着だ

った。何か問題が発生したときにその問題をこの土地から駆逐する。それが私の役目だったはず。だから、そんなものに入る必要はないと考え、部活に入るつもりはなかった。

でも、その理由がここに発生したような気がする。

神楽 仁 隻腕の高校生。私の運命を大きく傾かせる存在。

運命？そんなものは存在しない。あるのは宿命のみ。呪いと同義の、縛られたら最後成し遂げなければその呪縛から逃れられない、天命。だとしたら。

私が彼を巻き込んだことになる。直接でないにしても。間接的に彼の持っている義手は特殊だ。人類の技術では作り出せない物質で作られている。所以、見つかる<sup>も</sup>とそれなりに厄介なことになるだろう。

彼とクラスは違う。それはチカラを以<sup>も</sup>つてしても動かせない。それでも、最大限彼の傍に付いている必要がある。あの液体を注いでしまった以上は。

「つ、作る？」

無意識にそんな言葉が飛び出していた。私自身も驚いたが、彼もそれ以上に驚いていた。

「そ、そうだ。作るんだ。俺がベースできるんだ！なあ一緒にやろう！」

ベース。バンドの中でも下の方を支える大切な役割だ。

「……う、うん……。私もやってみたかったから……。やるっか。」

そんな風に言ってしまったが、私にそんな意欲はない。それは申し訳ない念で一杯だ。私の本心を知ったら彼はどんな顔をするだろうか。

でも……。彼が私を必要としているなら……。

彼を見ると、心の底から雄叫びを上げたいが、我慢したような面持で喜んでいる。

「でも……。あと一人は？」

私は生徒手帳に書かれた部活発足のための要項を思い出していた。

三人以上の部員。一人以上の顧問の先生。文化の向上のための目的。

これなら少なくとももう一人必要になる筈だ。

そうすると、彼は左手の親指を私に向けて立てて、さっきよりも張りのある声で言った。

「安心しろ。このテンションになってしまった俺を止められる奴はいない。」

「は、はあ……。」

そんな彼をみて、私はただ見ることしかできなかった。

「心あたりがあるんだ。自己紹介のときに言ってた。ギターが趣味だつてな。」

なるほど。そういうテンションのことかと私は納得した。

「何でそれからすぐ誘わなかったの？」

「ん。そいつと二人組んだとこでなんも変わらないだろう。ましてや、ほとんど会話もしたことないし……。でも、そいつがバンド好きだったら、いけるかもしれんな……。」

そんな彼を見て、思わず吹き出してしまった。まるで何かに夢中になっている子供の様に見えてしまったからだ。

「あ、ごめんなさい。別に、馬鹿にしたわけじゃ……。」

驚いたように目を見開いて私を見てきた彼に、私は慌ててそう言い繕った。

「なんていうか。こんな熱血な人初めて見たから。」

「……俺、熱血か？」

熱血というよりも、もっと適切な単語があるような気がするけど、私はそこまで思考がまわらなかった。

彼は今までの会話を反芻するように考え込んでいる。

「どうしてバンド好きなの？」

そう訊くと、彼はふいと顔を上げた。

「憧れてたんだ。子供のころ、ベース教わってからかな……。よくここまでやれたと思うてる。」

子供の頃、か。羨ましい。私は一体どんな子供時代を持つはずだったんだろうか。それは疑問というより、理不尽な宿命に対する憎しみでもあった。

「……えと。なんていうんだっけ。」

「星山新。」

「……ああ……転校生の……。」

「うん。」

そういえばそういうことになってたっけ。

「他のところ行ってただけ、入学した直後にお父さんの転勤が決まって。」

「へえ……。」

私は咄嗟に思いついた言い訳を言ってみたものの、「お父さん」らしき人物はおるか、私が住んでいるとも思えないこの部屋がその矛盾点を誇張させていた。

彼も気づいているんだろうけど、気づいていない振りをしてくれていた。

「んで、なんで星山はバンドやりたいんだよ。」

「何でって……困ってるんでしょ？」

思わずいつてしまっていた。

彼は入りたい部活があるのに、学校にはなく、作るための部員も伝もない。困っていた。私が彼の要求を受諾したのは、互いの利害が一致するから。

「困ってる？俺が？」

「うん……。いや、なんでもない。忘れて。うん。私も懂れてたから。」

首を大袈裟に振って、否定する。そんなこと言える筈がない。こんな純粋な人に……。

「……でもさ、最初から全員できる人入れなくてもいいんじゃないの？」

そこでふと思いついた疑問を出してみた。普通こっぴどいのは、

希望者を募って、皆で一もとい零から作り上げていくものでは。上手い下手関わらずに。

「いや、ここは全員できるのをいれて、実力を見せ付けて、希望者を募るのがいいんだ。どうせ音楽経験のある顧問は吹部に持ってかれてるだろうし、それぞれの楽器の専属が居た方がいいんだ。」

「へえ……。」

どこらへんがいいのか分からなかったが、彼はどうせ今募らせたところで、入ってこないことを分かっているような言い方だった。そんなはずはないと私は思う。

それでも、楽器の専属が必要という部分は頷ける。

「さて。俺は今どこにいるんだ？」

話が一段落ついたところで、最初に訊くべきことを彼は訊ねてきた。それだけ、バンドをしたいという気持ちがまっすぐなのだろう。「私の家。」

「……お前の家広いな……。」

「ううん。私の家はこの部屋。」

きつとこの廃病院全体を見てから、この部屋の規模で捉えた見解であるとともに、冗談を少しばかり混じらせた意味でいったのだろう。

「んで、何で俺はお前の家に居るんだ。」

「だって腕が融けてたから、ほっとけないでしょ？あ、いいそびれるとこだった。」

そう言ってから、私はようやく義手のことを思い出した。

ソダロステイックの存在が人類に知れたら、恐らく国と国との格差が更に大きくなってしまいうだろう。形重量を自由に変えられて、鋼よりも丈夫ときたならば、これに飛びつかないものはいない。そういう大きな噂は、小さな穴から漏れていきいつかは海を構成してしまうのだ。

「なんだ。」

「あの、その義手は絶対に人に見せないで。」

「……無理だろ。」

彼は左手をがしやがしや動かしながらうめいた。

「うっん。無理じゃなくてやらなくちゃいけないの。貴方だって、左腕なくなるのは嫌でしょう？」

そういうと、彼の顔つきが変わった。きっとそれもバンドの影響  
力が大きいのだろう。

「……でもどうすんだよ。」

「これをはめて、長袖を着れば、よっぽどのが無い限り大丈夫  
だと思う。」

私は予め用意しておいた、黒い手袋を差し出した。

これはソダロスティックにゴムを化合させた物質で作った手袋で、  
伸び縮みが自由に利いて、なおかつ丈夫に作られている。黒くなる  
のは仕様で、これ以外の色に染める方法はまだ見つけていない。こ  
の黒さは、透明度零%で透ける心配がないため、義手を隠すにはも  
ってこいだろう。

「長袖？これから夏だぞ。暑いし……。」

「感覚神経は繋がってないから、暑さは感じないと思う。もし感じ  
たとしても、我慢して。」

彼が訝しげにその黒い手袋を義手にはめると、予想通り綺麗にそ  
の黒い生地の下に義手は隠れてしまった。

「あんまり薄い長袖はやめて。透けるから。」

「ああ……もちろんだ。」

「あともう一つ。」

「何だ？」

「家族にも見られちゃまずいの。どこに居るか分からないから。」

「何が？」

また口を滑らせてしまった。無論、噂の漏洩口である。

私は首を振って誤魔化すと、二の句を継いだ。

「とにかく、誰にも見られちゃまずいの。それから私も監視しなく  
ちゃいけないの。」



私がそういうと、彼は気圧されたように、首を縦に振った。

「だから、私の部屋に引越してきて。」

彼の顔が硬直した。遠慮と戸惑いが交錯して、新たな分野に踏み出そうとしているよう。

私だつて羞恥心くらい弁えている。所以、年頃の男女が一つの部屋で暮らすなんて、とんでもない。それでも事情という壁は常識を大きく越脱し、重厚長大に立ちはだかる。

「……分かったから、その目はやめてくれ。」

私は気がつくと、彼のことを凝視していたらしく、私は慌てて視線を逸らした。

「で、でもすぐには無理だ。家族に説明しなくちゃいけないし、賛成ももらえるか分からない……。」「当然だ。」

「私も説得しにいくから。」

「や、や！一人暮らしって設定にすんだよ。どう考えても駄目だろうが！年頃の男女が同棲だなんて！」

確かにそうか。

「私は構わないけど。」

「お前は良くても世間が構わなくないんだよ。」

……冗談だとは気づいてくれなかったみたいだ。

ふと、彼の顔に翳<sup>かげ</sup>が落ちた。

「三日って言ったっけ。」

「うん。」

そうか。私は自分の迂闊さを悔やんだ。

彼は私と違って、家族がいる。三日間家を空けておいて、心配しない家族などいないだろう。さらに、三日後に帰ってきておいて、一人暮らしを始めると言い出して、賛成を示す親などいるはずがない。

「……。」

彼は困ったように考え込んでいる。どこか思考をめぐらせている、

その中央にあるものが私の考えているものとは違うような気がするけど、私は掛ける言葉が見当たらなかった。

「あの……もう帰っても大丈夫だから……。」

「ああ悪い。」

結局、困らせておいて、帰らせるような発言をしてしまう。彼は、とりあえずといった感じで納得してから。

「俺帰っていいのか？」

「え？うん。だって義手が動けばなんとかなるから。」

彼は混乱したように、そういえばあのとき木から落ちてたよな？  
と言って来た。

「そのあたりは、ちょっと……。」

本来なら大怪我でこうしてぴんぴんとしているなんて、絶対的にありえないんだけど、私が下にいたことが幸いした。私があの場合にいたことはある種の幸運だったわけか……。

「ならいい。んじゃ。」

彼はそう言つて、扉から出て行った。

「あ！ちよつと待って！道分かるの！」

私は慌てて叫んでみたものの、彼は階段に吸い込まれるようにして消えていた。

## 義手（後書き）

ん、無理に沿わせたものだから、結構酷くなりました。とりあえず、  
長続きするか様子を見えます……

## 寂寞

数十分後、なんと神楽君は大きなスーツケースを抱えて戻ってきた。なんというか、あっさり追い出されてしまったらしく、顔が悲痛に歪んでいた。

「え、早いね……」

かける言葉も見当たらず、とりあえず素直な感想を述べてみる。少なくとも結論は明日出すであろうと思っていたのだが……。

「ん、半ば追い出されたって感じだな。」

もつと海溝よりも深い家庭事情がありそうだったが、そうしてできた傷に塩を塗りこむようなこと、私にはできなかった。よくみると、頭に瘤らしき突起が出来ている。

「どうしたの……それ。」

「ん、これか？殴られた。」

やっぱり無茶なこと言ってしまったか、と私は申し訳なくなる。

いくら事情が事情とはいえ、私が勝手につけた都合だし、私の自分勝手だ。彼には自分で選ぶ権利があつたけど、腕がなくなる、と半ば脅しといった感じで了承させてしまった軽率さを私は悔やんだ。

「い、いや、これはだな、妹に殴られたものであつてだな、決して口喧嘩になつた成り行きで追い出されたというわけでは、断じてない。」

彼を見ると、狼狽した表情で私を必死で慰めようとしてくれている。

「うん……ありがとう……」

「いや、マジだからな。言っとくけど。あと、俺は半ば、てか全面的に後押しされるような形で家を追い出されてきたから、別に電話とか掛ける必要も無いからな。」

半眼で私を見据えて、私がとろうとしていた行動に釘を刺されてしまつて、私はぐうの音もでなかった。

「えと、その荷物はあそこに置いて……」

「ちよ、ちよっと待ってくれ」

私が家具のスペースの各自の取り方を説明しようとしたところ、彼から上ずった声で制止が掛かる。

「なあに？」

「あのさ、ここは病院だったわけで、この病室は個人部屋だよな？それなら、ベッドが一つしかないんだよな……？」

私は彼の言いたいことが分かった。

「あ、二人で寝るのがきついのなら、私が下で寝るから……」

「ち、ちがつ、最後まで聞いてくれて。つか、二人で寝るつもりだったのかお前は！」

死の宣告を受けた罪人みたいに、彼が狼狽の色を深めて顔を赤くしてそう言っただけの話を聞いて私は首をかしげて言った。

「え、だってそうなるでしょ？」

「……まあそれはいいとして……そういうのは駄目だと思うんだよ。どちらかが一人、この冷たい床で夜を越すなんてな。」

それは良心的な問題だろうか。

「え、私は別に構わないんだけど……」

私が言うと、彼は顔を歪ませた。

「お前なあ……。そういうのは駄目だろうが……」

「え、なんで？」

「いや、なんでもない。だからだ、俺一人で寝れるわけがないだろうが、星山が一人で床にねてんのに、俺が一人ベッドを占領してぬくぬく寝てるなんて。」

「え……それならやっぱり二人で」

「ただだからそういう問題じゃねえっての！他に部屋は取れないのだから話だよ！」

私が驚いたように目を開くと、彼は何故か八つとしたように口を紡いだ。

「そそっという意味じゃ……別に好意を無駄にしようとしているわけ

じゃない。ってか、年頃の男女が一つの部屋というのは、事情がどうであれ、駄目だと思う。俺たちは良くても、世間が許さないだろうな。だ、だからだ。俺はお前の家、ここだけど、この隣に住むだけがいいじゃないか。うん。そうだろ？」

私は一考する。

彼に引越してもらったのは、家族から離れてもらう、人から隔離するため。酷い言い草だけど、これが目的なのは確か。彼には申し訳ないけど、運が悪かった、と諦めてもらうしかない。

しかし一人ならば、私とそう近くなくてもいいかもしれない。まして、隣ならば、おなじくらい人目につかないし、何かあってもすぐ駆けつけられる……はず。

それとあまり関係ないが、『俺たちは良くても』というところに、どこか安堵感を覚えてしまった。

「……分かった。」

「ああ、分かった。ありがとな……」

そう言って、彼は部屋から出ていきかけて、

「どの部屋がつかえる？」

と訊いてきた。

「ええと、すぐその階段の向かいのところが一番近いかも。」

「ああ分かった……。」

彼は頷くと、部屋から出て行った。

しばらく、呆然として私は見ていたが、もしかしたら彼との同居を断られたことに落胆していると気づいて、苦笑いをせざるを得なかった。

と、思ったが彼はスーツケースをもって慔然とした表情で部屋に戻ってきた。

「どうしたの……？」

「いや……」

彼が抱えているスーツケースには私服の上下が一点ずつ、大きなその部屋を占領するように置かれていた。

それを見て、私は背筋が凍りそうになるほど体が強張った。

「おおおおおい！大丈夫か！」

彼が必死の形相になって、私に呼びかけている。

なんというか、彼にはとんでもないことをしてしまったらしい。

家出を強行させて、親と殴りあつた挙句、この結果。私は、常識から考えられなかった……やっぱり……

「ひっ」

「うん、これは事情が深すぎるんだよ。普通の人からみりゃあこうなるのは当たり前だ。うん。星山、ちよいと聞いてくれ。」

彼は私の肩をがくと揺らすと、そう言つて家に帰つてから、ここに至るまでの顛末<sup>てんまつ</sup>を話しはじめた。

#### 回想中

「ただいま。」

「お帰りなさいー。遅かつたじゃないの。」

心配の余地なし。てかここまでくると、俺の人権つて存在するのも疑問に覺えてくるんだが……。遅かつたですむ時間じゃないだろう。

「学校もサボつたみたいだし、心配したのよー。」

そついや学校もサボることになつたんだっけか。平日挟んでたかな……。

ぼんやりとそんな事を考えて居間に入ると、何かただならぬ空気の匂いがした。トラの気配に勘付いたシカのように、足を止めて周囲を見渡す。

なんか……どうしたんだろう……この空気。この後に訪れる未来は、必ずといつても良好とは思えなかつた記憶が……。

「バカー！どこ行つてたのよー！」

ああ、やっぱりですか。こちらの存在を軽視していました。我々のミスです。

妹が、ゴミ箱（空）を担ぎ上げて振りかぶっていた。それ命じゃ

なくてゴミを捨てるものなんです……。

ライオンに睨まれたサイの様に動けない俺に、ゴミ箱の脳天直撃が綺麗に前頭部に炸裂して、星が宙にキラキラと舞った。そのまま勢いで、廊下に倒れこむ。

「いっでえ!!」

「心配したのに!!」

その勢いで妹は、俺に馬乗りになってゴミ箱（空）（鈍器属性）を振り上げる。ちょ!待て!この展開は!

「これくらいで許してあげる……。」

そう言つて、軌道修正のきかない道に追い込まれた俺に言い残して俺から降りる。なんちゅう制裁方法だ。これでこれなら、一人暮らしをするといったら何百発殴られることやら……。あ、でももしかしたら墓での一人暮らしなら認めてもらえるかも。

「ほらあ三日分のご飯よお。」

そんな母の軽快な声が聞こえてきて、なにかの匂いがしてくる。

「……今の心境でこんなもん食えないんだが……。」

テーブルに置かれたのは、本当に三日分のメシ。ただ、質量はそうだろうが、これはあつ意味では究極だろ。

三日分のメシをごちゃまぜにして一つの皿に盛るのはやめてください。これはちょっと精神的な危ない病気なんじゃないのか?夫が居ないことによるノイローゼからか?

「そんなことより……。」

俺は、その大皿に盛られたハリネズミの死体にカレーをかけたようなものを、テーブルの端っこに寄せた。そして、俺は簡単そうで意外と難しいボウリングの様な例のことを話題の棚に上げる。

俺は精一杯の真摯な顔で、言つた。

「俺、一人暮らしをする。」

「!」

母の顔が引きつった。背後から妹のローキックが飛んでくんじゃねえかとビクビクしたが、飛んでくる気配が無い。気絶してるのか



？確かめたくとも、後ろを向いた瞬間足の裏が目の前にありそうだから振り向けない。

もちろん拒絶を俺は覚悟していたというか、期待していた。当たり前だ。いつもこんな感じで俺を放置プレイしているのだ。というか、本当に無頓着で妹にも口出ししない。メシと居場所を提供しているだけなのだ。そんなのが親でよく妹のようなしつかりものが出来たな、とかよく俺グレなかったなとか思ってるのだが。いつかこういうことを言って確かめたかった。俺が本当にこの人の息子か。

「あ……あ……」

おおお、このショックを受けたような顔。これを待ってたんだよ。狩人が三日ぶりに獲物を見つけたような感じ。

だが……数瞬後その獲物は必ず手に入るわけではないと俺は悟った。

「やつと決意してくれたのね！」

「はあ！？」

狂喜する母。体があらん限り、全てを用いて喜びを表現して、倉庫として使われている父の部屋にダッシュしていった。そして、スーツケースをがらがら転がしてくる。ちなみに妹は気絶してしました。絶望したのかね。

「いつか言い出すと思っただけに楽しみにしてたのよ！まさかこんな早く役に立つなんて！」

ミュージカルの姑みたいなのりでそう言って、スーツケースを押し付けてくる。ってか軽っ！！なんで？どうして？普通重いのが恒例だろうか！

「じゃあね。お母さんは貴方のことを一生忘れな」

「待てっ！待て！自分の世界に入るな！なんでそんな現実の受け入れが早いんだよ！もっと渋れ！」

母はまだ夢のミュージカル公演中！って顔をして、答える。

「何言ってるの！昨日までは、猫を見ただけでビビって漏らしちゃったのが、今日になって一人暮らしするって言い出すのよ？それを

否定するだけの権利を私は持つてとは思えない！」

ヤバイ。これ……早く精神科に連れてつてくれ。昨日俺この家に居なかったはずだぞ。どれだけあんた疲れてるんですか！？

てか、普通は常識的に考えてだ。まず住居のあてはあるのか訊くだろう。次に仕送りの価格を考えるだろう。間隔も。次に家事とかそういうの訊いて、それからその家が本当に自分にあつてなのかどうかを確かめて、近所付き合いを云々をして……。

とにかく、こんな、俺一人暮らしする！はい、いつてらっしゃい！的なのは認められん。てか、星山もこんな早くは望んでないだろうし、そんな映画的なことを考えるのはこの母親しかない！てか、理由を訊け！

藁で作つてある思考堤防があつという間に決壊し、決して少ない情報が俺の脳内を支配する。要するに、動揺しているのだ。

俺はこの人の息子ではないっ！

「……。」

そんなスーツケース（猫より軽い）を持って、母の狂乱振りを呆然と佇んで見ていた俺のよれよれの制服の裾が引つ張られた。

「……ん……なんだ？」

妹が、目に涙を浮かべていた。背が俺より大分低いので、上目遣いになっておりその微妙な角度がそれに上乗せされて、効果抜群！的に俺の中枢神経を麻痺させた。

「あ、あたしも……引き止めないよ。きつと何か訳があるんでしょ？あたしの部屋にも入つてこれないほど弱虫のお兄ちゃんがそんな事言い出すんだもん。」

いや、それと弱虫は沖縄と北海道ほどかけ離れているぞ。用もない妹の部屋に入るか普通。

それでも、そんな言葉が妹の口からでるなんて、これっぽっちも予想できなかったので、俺はそのまま富士山の登山道で図書館を見つけたような顔で、身じろぎすらできずに突っ立っていた。

「うん。だから……安心していつてきていいよ。これだけは許して

あげる。」

俺は大変な勘違いをしていたことに気が付いてしまった。それは、この十五年しか生きていない弱い俺をずっと欺いてきた、とても重くて残酷な嘘。

こいつらは俺の家族なんかじゃねえっ！

終了

「　というわけで、追い出されてしまったんだ。」

「……そう。」

ところどころ重大な欠陥が見られそうな家族だった。なんというか、奇抜というか奇怪というか。変わり者といってしまうえばそうかもしれない。

だが、私にとっては羨ましすぎる話だった。

「いい家族ね。」

紅茶を彼に注ぎながら、私は思わず呟いていた。そう言うと、彼は思いつきり顔をしかめて見せた。

「どこが。」

私から見てもすれば、家族という社会集団の中でも一番身近にある存在があるだけでも羨ましい。誰から、何の説明も受けずにここに飛ばされここに住んでいる私にとっては、どんな不遇な家庭だろうと、羨ましい以外の感情は覚えられなかった。

「すこし傾いてるけど、ご飯を用意しておいてくれたところとか、妹さんの愛の鉄拳が飛んできたところとか、神楽君が決めたことを否定しなかったところ、かな。」

私がそう言うと、彼は何かに気づいたように深くため息をついた。「どうせすぐ終わってしまう人生なら、少しは楽観的に考えないと生きる意味がないもの。これも一種の自立ね。」

自分で言ってみてから、私に楽観的な思考ができるのかどうか、疑問を抱いてしまった。結局のところ、彼の義手を作り、無理矢理近くに住まわせてしまったのも、私の我が儘、自己保身のため。

「……………」

自分の言った言葉に虐げられて、私は陰鬱いんうつな気分になる。

これから私は、どう生きていけばいいのだろうか……………」

「……………悪かった。」

彼が、突然そんな事を言ったので私は少し驚いて彼の方を向いた。

「両親……………居ないのか。」

……………」

「なんというか……………人間てのは、そんなもんだよな。ある物事に適応すると、別の物事を欲するっていうのか？日本じゃ皆勉強やだとか言ってるけど、世界にはしたくでもできない子供がたくさんいるとかいうのが良い例か。」

彼は照れるように視線を逸らした。私も釣られてその方向に視線を向ける。窓の外は、未だに見慣れていない、閑静な旧街道が見える。

「寂し……………かったのか。」

ぎくりとして、私は彼の方を見た。未だに視線を窓の外に向けている。

自分の胸に問い掛ける。

寂しい？ずっと、一人でどこか得体の知れない世界に閉じ込められて、一人にも慣れてしまい、何のために生きているのか分からなくなっていた、私。

寂しかったに決まってる。

「……………うん。」

思っていた以上にか細い声が出た。時に憎しみを、時には哀しみを、時には喜びを具体化した何かが、私の瞼まぶたを熱くしてくる。

「あ……………っと……………。ん。」

彼は言葉に窮したのか、意味にならない言葉を言っている。

「ん。それじゃ何のために俺がいるか分からんな。」

やがてそう言って来たのを聞いて、ぐすりと顔を上げると、彼は笑っていた。

「俺はバカだからどうにもならんかも知れないけどな。傍に居るとくらいなら……できる……」

そう言ってから、彼は何故か毒でも呑んでしまったかのように、語尾を濁した。

私が首をかしげていると、彼は取り直したか、言葉を締めた。

「悪い、臭かった。」

思わず吹き出してしまう。

もっと別な自然な形で、こういうことを望みたかったが、これもそう悪くないかもしれない。

私は与えられてばかりだ。チカラからといえ、彼からといえ。変わりたい。

## 勧誘

どこか緊張した面持の神楽君と共に、私たちは学校への路にっていた。道を越えるに連れ、周囲を歩く高校生も増えていつている。私はてつきり、家が別なら登校も別々かと思っていた。もちろん、偶然出会ってしまったならば、一緒に行くことも有り得るが。

一応、家を出るときにドアをノックして確かめたものの、居なかったので私はそうだと思って、病院から出た。しかし、そこには焦りを表情に鏤<sup>はいつ</sup>めた神楽君が立っていたので、私は自分の考えを恥じた。

彼は待っていてくれたばかりか、待たずに行こうとしてすまんかった、と謝ってきた。私はどうしたらいいのか分からず、ただ戸惑ってあやふやな返事をしてしまった。なんと言っていたかは覚えていない。

そういう次第で、私と神楽君は肩を並べて歩いている。周囲から好奇の視線が遠慮なく私たちを舐めまわし、恥ずかしくなつてつい視線を彼から背けてしまう。

私たちの間に大して共通する話題も無く、ただ沈黙に流れを任せてしんみりと歩いている。

「……そういえば、ギターに心当たりがあるって言ってたけど、誰？」

「ん？あ、ああ……。」

彼は意表を疲れたように、目に焦りを浮かべたが、すぐに取り繕っていつもの表情に戻した。

彼の手には、私が言ったとおりに黒い手袋がはめられており、義手は完全に隠されている。あとは、馴染むまで鳴り響くモーター音などをうまくやり過ごすことができれば、これから決してバレることとは無いだろう。

「同じクラスの奴だ。確かなんつつたっけか……目立たない奴なん

だよな。木島とか言ったか。あんな弱そうな奴が、ギターなんてやってるんだなあ、って思ったから印象に残ってるんだ。」

「へえ……。」

私は外見が弱そうで、ギターをやっているとわれて、ぱつとイメージは思い浮かばなかった。

そういう類の楽器をしてる人というのは、見た目が弱そうではないというのは、ただの私の先入観。そういう人だって居るだろうし、腕だって立つかもしれない。

私は少し反省した。

「あ、おはよー」

「お、おはよう……」

笑顔で挨拶をしてくれる真利に、私もぎこちなくだけど挨拶を返す。まだ馴れない。

それなりに余裕をもって来れたらしく、まだ始業まで時間がある。彼とクラスは大分離れているらしく、下駄箱の時点で別れることとなってしまった。惜しいとかそういうわけではないがもったいないな、と私は矛盾した思考を抱いてしまう。

彼は先週の後半辺りから学校に行っていない。目覚めたのが土曜日だったから、木、金と休んでしまったこととなる。無断で。

うまく私から弁明できればよかったが、肝心なときにチカラは働かないらしく、彼に言い訳を上手くするように言う事しかできなかった。

勝手に問題を押し付けて、後は知らん振りしている。そんな風に彼に思われなくなかったが、そう思われても仕方が無い。

しかし、こうして彼に嫌われたくないと思うのは何故なのだろうか。いくら見張る必要があるといっても、あの創部の誘いを断らなかったのだろうか。私の中で答えは出ない。

私は寂しかった。今、もう一度彼に真正面からそう訊かれたら、私はそう答えることになるのだろうか。

私は首を振った。真利は続々と登校してきた友達と楽しそうにしゃべりをしている。

嫉妬というよりは……憧れ。尊敬。畏敬。いけい

私は普通の少女。世界と隔離されても尚、人との繋がりを強く望んできた。

答えが出ない。私は何を求めているのか。何を畏れておそあの輪に入ることができないのか。

私には……記憶がない。

「今日はお弁当持ってきた？」

「え……。あ……。」

どうもうつかりしていて、忘れてきてしまう。注意力の問題か、はたや記憶力の問題から自意識の問題か。

真利が、困ったような顔をした。どうせなら笑って欲しいところだったが、ここが彼女のいいところ。

「あ、と……今日は大丈夫。お金持ってきたから。」

「うん、それなら良かった。」

彼女はそう言って笑った。清々しい、見るものの気持ちを和ませる。

「それじゃ買ってくるから……。」

「うん、行つてらっしゃい。」

私はその言葉に、自分でもわかるくらいぎこちない笑顔を返した。

中庭に置いてあるかのようにある、技術室。元々、倉庫だったらしく、使えるほど整備がなされていないのだとか。周囲と比べて、大分前からあったのか、木の色が露出し、年季を感じさせる。

放課後は陸上部などといった運動部がこのあたりを占領するらしく、放課後は地面を蹴る音がやかましく聞こえる。

でも昼休みでは、屋上の人気には勝てなく、そもそも昼を食べるという場所ではないので、閑古鳥が鳴いている。



気休めに植えられたのか、一本だけ隔離されたように生えている木に背中を預け、購買部で買ってきたあんぱんを頬張る。こしあんとおつばあんの間、新しい感覚という宣伝文句が目に入って、そこその値段だったから買ってみた。中途半端に溶けきらなかった、カレーのルーが入ったカレーみたいな感じで、そんな美味しいとは思わなかった。それでも人気なのだから、私の舌が肥えてしまったのだろう。

これを買ったお金に関してだが、どうしようも無くチカラを使っ  
て作ってしまった。どうしようもなく犯罪だが、ここは生きるため  
にはしょうがなかったから……なんて言っても単なる言い訳になっ  
てしまうが、百円玉を量産した。銅とニッケルを四対一の割合で混  
ぜた化合物が原料だから、チカラを使って用意に作ることが出来た。  
酸化等での変色も研究し、同じ製造年ばかりのものではなく、色々  
と製造年を鑲めた。これで、そうそうバレることはないはず。

「あ……」

ぺしゃつとあんぱんが地面に叩きつけられて割れた。中身からぐ  
でんとした餡が顔を見せている。

特に、あんぱんが私の手から飛ぶようなイベントは起きていない。  
いつものドジだ。どうも考えことをしてしまうと、こう注意力が分  
散されてしまう。

私は神楽君が来る前にと、慌ててあんぱんの残骸を拾い集めて、  
木の裏に埋めた。もったいなかったが、ああなってしまったのを食  
べるなんてはしたない事できるはずもないし、木の根元に埋めてお  
けば、バクテリアやらが分解をして木の養分になる。この木に生き  
る意志があるならば、無駄にはならないはずだ。

私がこうして、閑散とした技術室の裏に昼休みに居るのは、朝、  
神楽君から頼まれたからである。どうやら、そのギタリストやらを  
ここに連れてきて、勧誘するらしい。

なんだかその光景を第三者に見られたら、なんか誤解されそうで  
私は怖かったが、目を燦々とさせてこの計画を話す彼を見ていると、

どうにも異論を唱えることができなかった。

暇を持て余した頃、彼は一人の男子生徒を連れてやってきた。なるほど、彼が言っていた気が弱そうを、絵に描いたような少年だった。目は忙しく泳いでいて、背中は怒った親の前にたつ子供の様に丸められている。

私が彼らの方に走っていくと、彼は私の存在に気づき、瞳孔を縮ませる。見た目に反さない性格らしい。

「話って言うのは……もっとリラックスできないか？」

神楽君は私の紹介を置いて、いきなり本題に入る。時間も時間なので、必死なのだろう。

彼の言葉が示す通り、彼は猛獣に食われる寸前の動物の様におびえているというか、動揺している。平静を保っているようで、目が一回転しそうなほど泳いでいる。

ちらりと神楽君が私を見た。すぐに視線を戻したが、それが何を意味するのかよくわからなかった。

「お前部活入ってないよな？」

木島君は、首をすぼめてぶんぶんと振った。肯定と受け取って、俺は安堵し続ける。

「あと、ギターを弾けるんだったよな？」

木島君は首を伸ばしてがくんがくんと首を縦に振った。いちいち動きが大きくてやりにくい。

「どんぐらいからやってる？」

「中学のとき部活でやってた……。」

神楽君の目に感心の色を映された。

「実力はどんぐらいかいえるか？」

「……コンクールで銀賞とったことがある……。」

神楽君が驚いた反動で咳き込んだ。それをみた木島君はびっくりと身をすくませる。正直、私も驚いた。神楽君の反応に。

神楽君は、なんとか体裁を取り戻し、話を続けようとした。

「それじゃあ訊くんだが……。」

と言った時、嫌な工事現場で鳴り響くようなモーター音が鳴り響いた。音源は、神楽君の左腕……義手だ。

くらりと、体が軋むような嫌な感覚を覚え、慌てて体に力を入れて持ちなおす。

神楽君は慌てて、それでも冷静な顔つきで木島君の死角で左腕を拳骨で殴った。途端にモーター音が止まる。

私は初めてだったが、もしかしたら、慣れているのかも知れない。「い、今のはなんでもない！そ、そうだ。閑古鳥の鳴き声だ！今は！」

怪訝そうに、口端を緩める木島君に神楽君がそう言って言い繕う。冗談めかしたことを言って、心に隙を持たせて話の軸から目を逸らさせようとする、何気に上手い作戦だ。閑古鳥の鳴き声で騙される人はそう居ないから。

「木島……頼みがある。」

いつもの様子に戻った木島君を見て、神楽君が話を元に戻した。

「一緒にバンド部を作らないか？」

また、木島君の目が驚いたように見開かれた。一挙一動が大袈裟で、真面目に接すると気疲れしそうだ。

「……い、え、本当に？」

木島君の返事を聞いて、私は眉をひそめた。どこか違和感がある。逃げ腰だった腰が、何かを見据えるように……目的が見つかったように据わったような気がした。

「うん。神楽君と私と貴方で。作らない？」

一応、打ち合わせどおり釘を刺す。

六感という不確実な要素での勘だけど、こう言わなくても彼は承認するはず。でも、神楽君に不審に思われてはいけない。

「……障りが無いなら……是非。」

おずおずとそう言った。

神楽君は、創部確定と決まって嬉しいのか、目が逝っている。

私は、急に変わった木島君の態度に不安を覚えていた。

彼が態度を変えたのはモーター音が聞こえてから。

もしもそうならば、神楽君に何か良くないことが起きる。

「おっしや！決まりだあっ！」

神楽君は、上ずった声でそう言った。私はそれを聞いて、今抱いていた疑問を忘れて思わず顔を綻ばせかける。

「……でも顧問は……？」

木島君が言った。

「顧問は適当に探せばいいだろ。どうせ部活持っていない教師も多いだろう。」

神楽君は、楽観的に言う。事実そうかもしれない。

「でも、ボーカルなしで大丈夫？」

私は、疑問を忘れて目の前にあることに専念しようとした。それ以前に、花形のボーカルが居ないのでは、話にならない。

私は首をひねってそう訊くと、神楽君は少し考えたような顔になったがすぐ元に戻る。

「別に俺たちが交代でやってもいいし……木島は無理そうだけど。」

ちらりと、神楽君が木島君を見やると、彼は首を横に振った。ちなみに私も彼に同意だ。

「まあ、希望者でも募ってオーディションでもすればいいさ。」

彼がそうだったので、私はそれでいいかと合点を打った。

「そんじゃ、戻るか。」

神楽君は、そう言うとき木島君を促して教室に戻ろうとした。私もそれに従う。

「ちょ、ちよつと僕用があるからさ……先行つててくれる……？」

そうしようとするとき、木島君がそんな風に言った。それを聞いて背中が強張るのを抑えられない。

「用？」

神楽君が怪訝そうに訊いた。木島君が頷く。

「先生に用事頼まれてたの思い出して。」

「そうか。」

神楽君は、気持ちが昂ぶっているのか、大して不審そうにせず、片手を挙げて立ち去った。

結局のところ、用があるうとどうであれ、校舎に戻るためには同じ昇降口に行く必要がある。だから、途中までは同じ道を辿ることになる。

私と木島君は、少し距離を置いて神楽君のあとを追うように歩く。  
「星山……さんだっけ？」

別れ際に、いきなり木島君に声を掛けられて思いっきり驚いて舌を嚙んでしまった。

「ふぁ……な・・に？」

「あ、えとさ……」

木島君は、言いづらそうに視線を逸らした。  
そして。

「神楽君から目を離さないほうがいいかもしれないよ。」

「……え？」

私の思考が混沌とする。

「そ、それだけ……」

「……うん……」

彼はそれだけ言って、職員室の方に歩き出した。  
どこと知れぬ焦燥感が私の心を支配した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0627f/>

---

義手と練成の問題

2010年10月9日22時17分発行